

こらっせ便り



2021年4月19日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

「今までできなかったこと、今できること」をしています！

事務局長 遠野 はるひ

3.11 から 10 年が経過しました。2 月 13 日には震度 6 強から 6 弱の福島沖地震が浜通りを襲い、現地の方々は悪夢を思いだされたことでしょう。この地震は 3.11 の余震であると知り、「フクシマ」が風化しつつある人間の時間と自然の時間の流れの違いを実感しました。

終息が見えないコロナ禍、夏までのワクチン接種も難しい現状なので、残念ながら今年もリフレッシュプログラムの中止を決めました。今年度の榎葉町児童館応援は、コロナ禍やワクチン接種の状況を見ながら、児童館関係者の皆さまと相談して実施する予定です。

コロナ禍でもできることをしよう

昨年度は予定していたイベントが中止に追いこまれましたが、できることをしようと、今年の 2 月に子どもの人権という視点から、子どもの貧困の現場と原発事故からの避難体験の二つのテーマでオンライン勉強会を開催しました。また東日本大震災復興祭りやパルシステム神奈川からオンラインイベントでの報告を頼まれ、新事務局次長の横山満里奈さんが登壇しました。さらに、夏のプログラムの開催場所であり、水、森林、気候変動など、世界が直面している大問題を考える宝庫でもある山北町をもっと知ろうと、昨年 10 月、11 月、今年 3 月、若い世代の山北ツアーを実施しました。そのほか 3 月には、詳しくは次回の「こらっせ便り」で報告しますが、こらっせユースとしてプログラムに参加し、その後、陸前高田市の漁村・広田町に移住してワカメ漁師になっている石渡博之さんと一緒に、「希望の若芽（ワカメ）プロジェクト」を 3.11 追悼イベントとして企画しました。

コロナ禍は、立ち止まって、こらっせの未来を考えるチャンスをくれました。昨年の秋、ワーキンググループを結成し、山北で新企画ができないかと相談中です。福島っ子の健康問題を主軸にリフレッシュプログラムや省庁交渉を継続するという第 1 の柱、学生が榎葉町児童館を応援する双方向交流の第 2 の柱、そしてこの新企画が第 3 の柱となればと考えています。具体化しましたら、皆さまにお知らせしてお力をお借りしたいと思います。

コロナ禍の中でオンライン学習会を行いました

2月28日にオンラインで学習会を開催しました。報告者は榎葉町で被災、中学生時代にこらっせに参加した佐藤聡さん、事務局の藤井あや子さん、こらっせユースの内海克也さん、事務局の金澤あゆみさんです。内海さんのテーマは「階層社会と教育格差」でした。佐藤さん、藤井さん、金澤さんから改めて報告を書いていただきました。

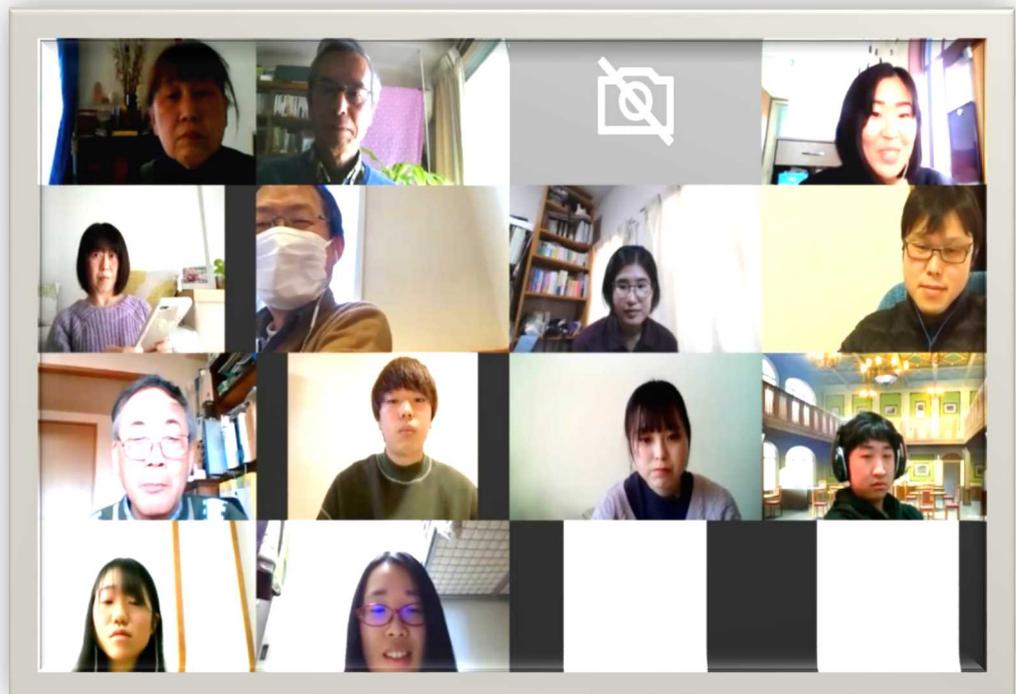
伝えたい自身の震災体験と地元榎葉町の現状

佐藤 聡

私は「伝えたい自身の震災経験と地元榎葉町の現状」というテーマで発表しました。

10年前の未曾有の災害にあったのは私が小学6年生のときでした。この世の終わりと思えるぐらいの揺れが町を襲いました。その後の原発事故で町民は避難生活を余儀なくされました。避難場所はプライベートが確保されていない狭い空間で、さらに長引く避難生活に一向に帰れる見通しが立たないまま、避難した誰もが疲労困憊でした。結局、私は計7回避難場所を移動し、転校を3回しました。そんな中、関西など遠くからきたボランティア団体が被災地に出向いて、物資の支援や名物料理の振る舞い、さらには応援のメッセージも頂き、被災した人への支えになりました。

現在の榎葉町は住民の帰還促進のため、商業施設の展開や交通インフラの整備（駅舎建て替えやスマートインターチェンジの設置）など大きく復興が進む一方で、実際の帰還率は約6割（令和3年1月31日現在）で、しかも若年層が少ないというのが現状です。



あの大きな災害は、私たちの生活を大きく変えました。生涯忘れることは決してありません。だからこそ、大震災を経験した私たちが災害とはどういうものでどう向き合っていくのかを震災を経験していない後世に伝えることが大切だと感じています。

神奈川で共に生きる～多文化・国際化の中での外国籍児童・生徒の就学保障～

事務局 藤井あや子

私の所属する団体ではチャリティショップ事業を運営、東南アジアを中心に国際協力・交流を進めてきましたが、国内の外国籍市民の教育現場に関心を持ち調べました。その中で驚いたのは外国籍児童・生徒は日本の義務教育の対象ではなかったこと（2019年に新法ができましたが）と、公立高校進学が費用的にもシステムの的にも難しい課題であることです。

神奈川県は外国人数は22.8万人です。県民の約40人に1人が外国籍という事になります。神奈川県には、日本の植民地支配時代に直接的・間接的な歴史的なルーツをもつ在日コリアンや華僑のオールドカマーと、1980年代以降に渡日したベトナムなどからのインドシナ難民とその家族、中国からの帰国者とその家族が生活しています。そして1990年代に国際結婚や就労のために来日した南米やフィリピン等のアジア諸国の人々など多様な国につながる人々が住んでいます。

そうした人々の定住化が進む中で県内の小中学校・高校、大学で学ぶ子どもたちが増えていきます。日本に来るまでの過程も定住に至るまでの経緯も異なり、抱える問題も多様です。ニューカマーと呼ばれる子どもは日本で「適応」や「言葉」が問題とされていましたが、さらに「進路」「アイデンティティ」の問題が加わっています。安心して生活し、学び、社会に巣立っていくためには教育や生活面のサポートを必要としています。しかし日本では外国籍者として、また民族的なマイノリティとして不利な扱いのなかで生活しているのが現状です。

このような中、2019年に「日本語教育推進法」が施行されました。これによって、初めて外国人に対する日本語教育の責任が国と自治体に示されました。日本語教育を受ける機会を確保すること（就学保障）や母語への配慮などを基本理念に盛り込まれました。

子どもの貧困を考える ～中学校の現場から～

横浜市中学校養護教諭 金澤あゆみ

学校生活で授業に励み行事を楽しむ子どもたちの姿からは、各家庭の事情はなかなか見えないものです。まして同じ制服を着て、不必要なものは持ち込み禁止の中学校や高校では、各々の差などは隠れてしまっていますが、友達と自分の違いに敏感な思春期には、かえって都合がよいのかもしれない。

そんな中、体調不良やケガを訴えて来室する保健室では「いつから？」「おうちの人は知っている？」などの会話から、家での生活が垣間見え、本人の本当の困り感に近づくことがあります。「ちゃんとしたものが食べられなくて栄養失調かもしれない」「ガスを止められていて、シャワーが水しか出ない」「膝の痛みはつらいけど、お父さんが失業中で保険証ないから病院はいけないと思う」など、本人の努力や学校の対応だけではどうしようもない現実があります。そんな時は本人と保護者の思いを聞いて、給食の無料制度や地域のフードバンクを紹介したり、行政の家庭支援につないだりします。

以前から、教育と医療との連携は大切にしてきましたが、最近は福祉との連携も必要になってきました。決して多くはないかもしれないけれど、現代の日本で見逃してはいけない『子どもの貧困』にかかわる問題、地域にどんな福祉の資源や制度が整っているかを知り、上手にコーディネートしていくことが大事だなと思っています。

山北の三保小、箒沢荘、町役場などを訪ねて

川遊びの記憶が甦る

太田 裕貴

3月10日、山北町を訪問しました。私は、こらっせユース学生リーダーとして参加しました。コロナの影響でしばらくこらっせの活動に参加することができていなかったため、久しぶりに活動に参加できると、とても楽しみにしていました。当日は、山北の色々な場所を回りました。

まず、午前中にビジターセンターを外から見学しました。今は使われていないようですが、大きな施設で、こらっせの活動で子ども達の遊ぶ場所とか、合宿する場所など色々な方法で使うことができなかと考えました。午後にはこらっせでお世話になっているバーデンライフ研修所とその周りを見学しました。一昨年以来だったので、懐かしく感じると共に、川遊びをしたところに行くと、楽しかった記憶が思い出されました。

今回、山北ツアーに参加して思ったことは、こらっせのリフレッシュプログラムをまた行いたいということでした。丹沢湖のきれいな水、山北の自然、この中で子ども達と一緒に過ごせる日がまた戻ってくるといいなと強く思った山北ツアーでした。

廃校になる三保小を尋ねて

山口 晴大

最初に伺ったのは閉校することが決まった三保小学校です。そこでは、飯田校長先生から貴重なお話を聞くことが出来ました。三保小学校では閉校になると決まった前年度は、三保小学校で思い出づくりを中心に学校生活を送られていました。しかし、コロナウイルス感染拡大の影響もあり、最初は思うようにいかず、四苦八苦する日々が続いたそうです。その中でも電子タブレットを用いた授業などを展開し、若い先生方などを中心に子供たちが笑顔になれるような授業を行うことが出来き、新聞などにも取り上げられました。



そんな中で、学校に通えるようになり、障害を抱えた児童など誰一人として欠けることなく運動会が行われました。山北町の自慢できることを歌詞にして、歌を作るという活動などを通し、三保小学校の児童の絆や思い出がずっと残り続けるのだらうと思います。

箒沢荘で聞いた「へろくり倶楽部」の話

水谷 響

箒沢荘ではお昼に「三保弁」をいただき、女将さんから民宿に関するお話や「へろくり倶楽部」のお話などを伺いました。「三保弁」は「昔懐かしい味を地元のもので」という気持ちから作られた、絶品のお弁当で、町内の数店舗がそれぞれの店ごとの味を登山客などにふるまっているそうで



す。「へろくり倶楽部」は民宿の女将さんたちが中心となって作り上げたもので、伝統の門入道グッズを手作りで作っている倶楽部とのことで、特にこの「へろくり倶楽部」の活動の話はとても興味深く、質疑応答をしたカフェの雰囲気と合わせてとても楽しい幸せな時間を過ごさせていただきました。

このクラブの方々は嫁いできた人が多く、小学校でワークショップを開いたり、道の駅でグッズを販売したりと町おこしの活動を行われていると伺い、山北町には外から来た方でも引き付けてしまう魅力がある

ということを話の中から感じました。

観光の目玉は新しいスポーツ「サップ」

大淵 桜子

丹沢湖記念館では、小塚さんから山北町の特徴やその魅力についてのお話をお聞きました地理的なお話から畜産業や観光業についてなど現在の町の様子なども含め、幅広く教えていただきました。

観光業の中でもサップというスポーツに力を注いでいるそうです。サップは男女年齢問わず楽しむことができるスポーツとして近年注目を集めていて、山北町では自然に囲まれた丹沢湖でのサップの利用推進のために様々な取り組みを行っているようです。

小塚さんのお話からは、観光業を盛んにしていこうという熱意が伝わってきました。私は自然の豊かさなど山北町の魅力を知るとともに、その魅力をどのように引き出し、生かしていくかを考えることの大切さに気付かされました。山北町は郷土愛に満ちた人々がつくる温かい町だと感じ、人と地域とのつながりについて考えさせられました。

湯川町長の話は、山北の魅力満載

青木 愛美

山北町への訪問で湯川町長とお会いしました。今日一日会った方々についてのお話をすると、町長はすべての方々のお名前をご存知で、地域の皆さんと湯川町長が絆でつながっているように感じました。

こらっせの活動を通して山北町と関わるなかで、私自身も自然豊かな山北の魅力をととても感じました。町の特産や観光資源、より良い町にするための施策など、どれも山北らしい素敵なものでした。特に私が興味を持ったことはサップです。立つて乗るサーフボードからの景色は、湖面から座って見るよりも大きく感じられるそうです。もっと山北のことを知りたい、また山北に来たい、と思えるような訪問でした。湯川町長、お忙しいところありがとうございました。



3月10日、東日本大震災かながわ追悼の夕べに参加

東日本大震災と福島原発事故から10年が経ちました。死者、行方不明者、発災後の災害関連死数を合わせると2万2167人もの方々が命を落としたこととなります。これらの方々を追悼する式典は2014年から毎年継続して開催されてきました。

今年はコロナ禍で規模は小さくなりましたが、3月10日、横浜市中区「象の鼻パーク」で開催されました。主催団体は「3.11 東日本大震災かながわ追悼の夕べ実行員会」で多くの神奈川県内市民活動団体の賛同を得ました。人々の人生を変え、たくさんのモノを奪った3.11に向き合い、神奈川に避難してきた方々と東北につながろうとする神奈川の市民ともに開いた追悼の場です。私たち「福島子ども・こらっせ神奈川」も、会場内のテントブースで活動を紹介する機会を得ました。

心がほかほかと温まったキャンドルの灯り

和泉 百香・赤崎 夏希

「東日本大震災かながわ追悼の夕べ」には、こらっせユースから和泉と赤崎が初めて参加しました。初めてなのでイメージができませんでしたが、参加して想像以上に貴重な経験させていただいたと感じています。

追悼の夕べが行われる日は毎年晴れるそうですが、今年も晴天に恵まれ屋外で行うことができました。14時頃から展示準備を始めました。リフレッシュプログラムの写真や児童館支援の写真を見ながら、懐かしい気持ちになるとともに、また活動したいという気持ちになりました。

こらっせのテントにはたくさんの方々が立ち寄ってくださいました。コロナの影響で例年より少なかったと思いますが、こらっせの活動に関心を持ってくださった方々や、福島に思いを巡らせている方々とお話することができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

その後、私たちもキャンドルにメッセージを書きました。和泉は震災から10年経った今でも苦しんでいる方々が沢山いるということ、震災や原発事故などで失われたものを忘れてはいけないと考え、「忘れない」と書きました。赤崎は、リフレッシュプログラムでの子どもたちの顔を思い浮かべ、「子どもたちの笑顔と明るい未来を祈って…」と書きました。

追悼の夕べが始まると色々な方の想いが書かれたキャンドルが一斉にとまりました。夕方になると冷え込みましたが、キャンドルの灯りをみていると心がほかほかと温かくなるように感じました。

